

A・スミスにおける富の概念について

原 田 実

目 次

- 1 商品について
 - 2 貨幣について
 - (1) 貨幣の形成について
 - (2) 貨幣が富であることを否定するスミスの論理について
 - 3 資本について
 - (1) 分業と資財の蓄積について
 - (2) 資財の資本への転化について
 - (3) 株式会社について
- おわりに

1 商品について

スミスの著作『国富論』の原文のタイトルは、*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* であり、正確に訳すと「諸国民の富の性質と原因についての一研究」ということになる。つまり、富とは何かということを解明しようとした著作である。スミスは「序論および本書の構想」と題したこの著作の冒頭で「あらゆる国民の年々の労働はその国民が年々に消費するいっさいの生活必需品および便益品を本源的に供給する資源（fund）であって、この必需品および便益品は、つねにその労働の直接の生産物か、またはその生産物で他の諸国民から購買されたものかのいずれかである。」（WN, I, p. 1. 邦訳『諸国民の富』（一）岩波文庫89頁。『諸国民の富』には原点頁数が記されているので、以下原点頁数のみを記す。）と述べている。したがって、富とは「生活必需

品および便益品」、つまり労働の生産物であり、そしてそれを生産する労働が富の「本源」ということになる。富の本源を生産過程に求めたのは、周知のように重農学派であるが、しかし彼らにあっては、その生産過程は農業に限られており、また農業においても、富は人間の労働の生産物というよりは、むしろ自然つまり土地によってもたらされるものであった。富の源泉を労働一般に求め、そして富を農工業を問わず生産物一般として捉え、これを基礎に経済学の体系を展開したのはスミスが初めてである。

さて、富がこのように規定されるとすれば、一国民が豊かであるか貧しいかは「この生産物またはそれで購買されたものが、それを消費すべき者の数に対する割合の大小に応じて」(WN, I, p. 1.) 決まることになる。スミスはこの「割合」を決定する事情として労働の生産力と物的財貨の生産に従事する生産的労働者とそれに従事しない者との比率の二つの事情を挙げ、そして最初の事情、労働の生産力を国民の豊かさを規定するより重要な事情としてとりあげ、これを『国富論』第一編のタイトルとするのである。いうまでもなく労働の生産力の発展は富の増大の最も主要な推進力であり、しかも資本主義的生産の重要な特徴は、マルクスとエンゲルスが『共産党宣言』において見事に描き出しているように、労働の生産力の驚異的な発展にあるのであり、したがってスミスが労働の生産力の発展をその著作の第一編のタイトルに据えたということは、彼が資本主義的生産の重要な特徴を明確につかんでいた——それもまだその驚異的な力が産業革命というかたちであらわに展開される以前に——ということを示しているのである。

さて、では労働の生産力はどのようにして高められていくのか。分業によってである。分業が生産力を高めていくというとき、スミスの主たる関心は社会的分業にある。彼は次のように述べている。「社会全般の仕事におよぼす分業の効果は、いくつかの特定の製造業でそれがどういうふうにおこなわれているかを考察すれば、いっそうたやすく理解されるであろう。」(WN, I, pp. 5-6.) 続いて彼は、分業がいかに生産力を高めるかをピン製造業において例証するのであるが、それはあくまで例証であって、彼が示そうとしたのは、「社会全般の仕事におよぼす分業の効果」である。つまり、工場内分業によって生産力の発展を数値をもって具体的に示し、それによって社会的分業の効果を示そうとしたのである。そして、スミスは社会的分業の発展から商業社会の成立を導き出してくるのである。⁽¹⁾

彼は次のように言う。「いったん分業が徹底して確立されると、人間が自分自身の労働の生産物によって充足しうるところは、そのもろもろの欲望のなかのごく小さい一部分にすぎないものになる。かれは、自分自身の労働の生産物の余剰部分のなかで、自分

自身の消費をこえてあまりあるものを、他の人々の労働の生産物のなかで、自分が必要とする部分と交換することによって、そのもろもろの欲望のはるか大部分を充足する。こうして、あらゆる人は、交換することによって生活し、つまりある程度商人になり、また社会そのものも適切に言えば一つの商業社会（commercial society）に成長するのである。」（WN, I, p. 24.）

スミスの重要な関心事になるのは、「商業社会」における富のあり方である。彼は商業社会の富を商品として、そして商品を使用価値（value in use）と交換価値（value in exchange）をもつ財貨として規定し、交換価値について次のように述べる。「諸商品の交換価値を規定する諸原理を究明するために、わたしは、第一に、この交換価値の実質的尺度は(measure)どのようなものであるか、すなわち、すべての商品の実質価格(real price) はどのようなものに存するか、ということを明らかにするよう努力するであろう。」（WN, I, p. 30.）そして、この問題に次のように答える。

「あらゆる人は、その人が人間生活の必需品・便益品および娯楽品をどの程度に享受できるかに応じて、富んでいたり、まずしかったりするのである。ところで、いったん分業が徹底しておこなわれると、一人の人間が自分自身の労働で充足しうるところは、これらのうちのごく小さい一部分にすぎない。かれはそのはるか大部分を他の人々の労働からひきださなければならないのであって、かれは、自分が支配しうる労働の量、つまり自分が購買できる労働の量に応じて、富んでいたり、まずしかったりせざるをえないのである。それゆえ、ある商品の価値は、それを所有してはいても自分自身で使用または消費しようとは思わず、それを他の諸商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品がその人に購買または支配させうる労働の量に等しい。それ故、労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度なのである。

あらゆる物の実質価格（real price）、つまりあらゆる物がそれを獲得しようと欲する人に現実に費やさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞（toil and trouble）である。それを獲得して売りさばいたり、他の者と交換したりしようとする人にとって、あらゆるものが現実にどれほどの値があるかといえ、それはこの者がその人自身に節約させうる労苦や煩勞であり、またこの者が他の人々に課しうる労苦や煩勞である。貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得できるとちょうど同じだけの労働によって購買されるのである。実に貨幣または財貨は、この労苦をわれわれからはぶいてくれる。これらの貨幣または財貨は、一定量の労働の価値を含み、われわれはそのとき、それらを等量の労働の価値をふくむと思わ

れるものと交換するのである。労働こそは、最初の価格、つまりいっさいの物に支払われた本源的な購買貨幣 (original purchase-money) であった。世界のいっさいの富が本源的に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってであって、富を所有している人々、またそれをある新しい生産物と交換しようと欲する人々にとってのその価値は、それがそういう人々に購買または支配させうる労働の量に正確に等しいのである。

ホブズ氏 (Mr. Hobbes) がいうように、富は力 (power) である。けれども、大財産を獲得したり、相続したりする人は、必ずしも市民または軍人としての政治力を獲得したり、相続したりするとはかぎらない。かれの財産は、おそらくはその両者を獲得する手段をかれに与えはするであろうが、この財産をただ所有しているというだけでは、必ずしもそのいずれかがかれにもたらされるとはかぎらないのである。その所有が、ただちに、しかも直接にかれにもたらす力は、購買力、すなわち、そのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配である。彼の財産の大小は、この力の大きさ、いいかえれば、その財産がかれに購買または支配させるところの、他の人々の労働の量か、またはこれと同一のことであるが、他の人々の労働生産物の量か、のいずれかに正確に比例する。あらゆる物の交換価値は、それがその所有者にもたらすこの力の大きさにつねに正確に等しいにちがいないのである。』(WN, I, pp. 32-33.)

スミスは、『国富論』冒頭では労働生産物をもって富としたのであるが、ここでは富は「購買力、すなわちそのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配」力であるとしている。富を生産物自身もつ支配力、すなわち生産物自身もつ一つの物的な力として捉えているのである。⁽²⁾ スミスはこの支配力を、労働と労働生産物に対する支配力としているのであるが、しかしこれは、「他の人々の労働の量か、またはこれと同一のことであるが、他の人々の労働生産物の量」という文章が示しているように、労働と労働生産物とを区別して述べているとは思われない。スミスは資本の蓄積を論じている『国富論』第二編においては、資本をして生産的労働者にたいする支配力として捉えているのであり、したがって、他人の労働生産物にたいする支配力が生きた労働にたいする支配力として発展していくのであるが、しかし、スミスはこの点について無自覚であり、また生産物がそういう力をもつことにたいして何の問題も感じていない。では、この支配力=購買力の大きさはどのように決定されるのであろうか。これについてのスミスの説明には、多くの混乱が見られるのであるが、し

かし、彼がその生産物を生産するのに要した労働量＝投下労働量がそれを決定すると考えていたことは明白である。スミスは第六章において——ここで彼は投下労働による価値の規定は、資本主義的生産のもとでは妥当しないと主張するのであるが——次のように論じている。「こういう事態（資材の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態——原田）のもとでは、労働の全生産物は労働者に属し、そしてある商品の獲得または生産にふつうついやされる労働の量は、その商品がふつう購買し、支配し、またこれと交換されるべき労働の量を規定しうる唯一の事情である。」(WN, I, pp. 49-50.)

見られるように、投下労働の量が支配しうる労働の量を規定する「唯一の事情である」と明確に指摘している。通常、スミスには投下労働による価値規定と支配労働による価値規定の二つの価値規定が存在すると主張されているが、投下労働と支配労働の関係は、投下労働の量が支配労働の量を規定する関係にあるのであって、マルクスの言葉で言えば価値と交換価値の關係に等しいのであり、決して二つの価値規定が並列的に存在するのではない。そして、スミスにとって支配する労働量を規定するものが、つまり投下労働量が、彼が求めようとした「実質価格」あるいは「交換価値の実質的尺度」なのである。

ところで、わが国ではスミスの価値尺度を支配労働として理解する論者が多いのであるが、ここではその代表的見解として、羽鳥卓也氏の見解をとり挙げ、投下労働、支配労働、そしてそれらと価値尺度との関連を見ていくことにしよう。

羽鳥氏は、上に引用した『国富論』第五章の文章について、「スミスはこの章の冒頭の三個のパラグラフで、彼の支配労働＝価値尺度なる命題を提示している」(『国富論』研究、未来社、1990年、50頁)と述べる。

つまり、スミスは価値尺度を商品の生産に投じられた投下労働ではなく、その商品が交換において支配、獲得する労働として捉えている、というわけである。そして、上に引用した第五編の冒頭の文章は、それを証明しているというのである。つまり、スミスの価値尺度概念はもっぱら価値の外在的尺度の意味で理解されているわけであるが、この点についてももう少し氏の理解を確かめておこう。

氏は、スミスは、資本主義的生産の場では商品の価値は投下労働によってではなく、支配労働によって規定されるようになると主張しているというマルクスの解釈は「明らかに誤りである」(同上書、49頁)として、次のように述べる。「なぜなら、スミス自身は第六章のなかのどこにも、商品の価値の大小・騰落を規定する要因として当該商品の支配労働量をあげたことはないからである。スミスは第五・六章のなかでは、商品の支

配労働量は当該商品の価値の大小を正確に測定する尺度である、と繰り返し主張していたにすぎない。」(同上書、49頁)

スミスが、「商品の価値の大小・騰落を規定する要因として当該商品の支配労働量あげたことはない」という主張には筆者も賛同するが、スミスの「価値尺度」概念をもつばら「価値の大小を正確に測定する尺度」としてのみ捉えるのは問題ないであろうか。マルクスの言葉で言えば、「商品の価値の大小・騰落を規定する要因」は、価値の内在的尺度であり、「価値の大小を正確に測定する尺度」は価値の外在的尺度ということになるが、羽鳥氏は、スミスの価値尺度概念をもつばら外在的尺度の意味でのみ理解するのである。つまり、スミスは価値尺度概念を首尾一貫して外在的尺度の意味でのみ用いたとするのであるが、スミスがこれを混同して用いているということは明らかではあるまいか。しかしこの混同にもかかわらず、スミスが求めようとした真の価値尺度は「価値の大小・騰落を規定する要因」つまり、価値の内在的尺度だったのではないだろうか。

氏が、スミスが「支配労働＝価値尺度なる命題を提示している」という上に引用した第五章の「三個のパラグラフ」の二番目のパラグラフで、「あらゆる物の実質価格 (real price)、つまりあらゆる物がそれを獲得しようとする人に現実に費やさせるものはそれを獲得するための労苦や煩勞 (toil and trouble) である。」と述べている。つまり、投下労働が「実質価格」であると述べているのであるが、「実質価格」は、先に引用した「この交換価値の実質的尺度は (measure) どのようなものであるか、すなわち、すべての商品の実質価格 (real price) はどのようなものに存するか」という叙述からも明らかのように、価値尺度と同じ意味なのである。つまり、ここでは、スミスは投下労働をもって、言い換えれば「価値の大小・騰落を規定する要因」をもって価値尺度としているのである。スミスは、先の引用に続いて価値尺度について次のように説明している。

「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である、と行ってさしつかえなからう。かれの健康・体力および精神が平常の状態で、またかれの熟練および技巧が通常程度であれば、かれは自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならないのである。かれが支払う価格は、それとひきかえにかれがうけとる財貨の量がおよそどのようなものであろうとも、つねに同一であるにちがいない。実際のところ、この価格が購買するこれらの財貨は、あるときは比較的多量であらうし、またあるときは比較的少量であらうが、変動するのはそれらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではない。いつどのようなところでも、えがたいもの、つまり多くの労働をついやさなければ獲得できないものは高価で

あり、たやすく、つまりきわめて僅少の労働で手にいれられるものは安価である。それゆえ、それ自体の価値がけっして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されうところの、窮極の、しかも実質的標準である。労働はいっさいの商品の実質価格であるが、貨幣はその名目価格 (nominal price) であるにすぎない。」(WN, I, p. 35.)

ここで述べられていることは、先に引用した第五章の第二パラグラフで述べられていることと同じことなのである。ここで「労働の価値」というのは、リカードやマルクスが解釈したように、商品として売買される労働について述べたものではなく、生産に投じられる労働について述べたものである。⁽³⁾ スミスにとっては、労働は toil and trouble であり、労働することは「安楽」、「自由」、「幸福」を「放棄」することであり、そのことによって労働は価値もつのであり、そしてかかる労働を投じられることによって生産物も価値をもつことになるのである。労働の価値が「けっして変動しない」のは、1時間の労働は1時間の安楽、自由、幸福の放棄であり、2時間の労働はその2倍の安楽、自由、幸福の放棄なのであり、賃銀労働者であれ、独立生産者であれ、その代償に受け取る財貨が多かろうと少なかろうとこのことは変わらないからである。だから、「労働は価値の唯一の普遍的な尺度であると同時に、唯一の正確な尺度」なのである。

ところが、羽鳥氏は上のスミスの叙述から「スミスは、商品の交換価値の真の尺度は当該商品が市場で支配しうる労働量である、という命題を樹立したのである」(同上書、63頁)という結論を導き出してくるのであるが、しかし、それを論証するものは何もないのである。スミスにとっては、商品の交換価値とは何であろうか。「当該商品が市場で支配しうる労働量」のことではないだろうか。そうすれば、氏の叙述は「当該商品が市場で支配しうる労働量」の「真の尺度は、当該商品が市場で支配しうる労働量である」ということになり完全な同義反復に帰着するのである。また、氏の理解では、「えがたいもの、つまり多くの労働をついやさなければ獲得できないものは高価であり、たやすく、つまり僅少の労働で手にいれられるものは安価である。」(氏は引用に際して、この部分を省略されているが)という叙述がまったく意味をなさなくなってくるのである。「えがたいもの、つまり多くの労働をついやさなければ獲得できないものは」、スミスにおいては、多くの「労働の価値」を含んでいるということであり、投下労働こそが価値尺度であるということを主張しようとしたものがある。

ところで、先に引用した『国富論』第五編冒頭の文章は、商業社会の到来とともに生じる富の性質における変化を論じたものとして、マルクスによって高く評価されてい

る。しかし、この評価に対して、スミスに内在するものではないとして有江大介氏より異論が出されているので、有江氏の見解を見ていくことにしよう。最初に有江氏が批判されるマルクスの文章を引用しておこう。

「ここで強調されているのは、分業によってひき起こされた変化である。その変化とは、すなわち、富はもはやその人自身の労働の生産物のうちではなく、この生産物が支配する他人の労働の量、すなわちこの生産物が買いうる社会的労働の量のうち存するということ、そしてこの量は、この生産物そのものに含まれている労働の量によって規定されている、ということである。事実上ここで言われていることは、ただ、私の労働は社会的労働としてのみ、したがって私の労働の生産物は等量の社会的労働にたいする支配としてのみ、わたしの富を規定するという、交換価値の概念だけである。一定量の必要労働時間を含む私の商品は、等しい価値をもつ他のすべての商品にたいする支配、したがって他の使用価値に実現されている等量の他人の労働にたいする支配を、私に与える。ここで強調されているのは、分業および交換価値によってひき起こされた私の労働と他人の労働の等置、言い換えれば社会的労働の等置であって（私の労働または私の商品に含まれている労働もまた、すでに社会的に規定されており、その性格を本質的に変えているということは、アダムには見落とされている）、けっして対象化された労働と生きている労働との区別や、その特殊な交換の諸法則ではない。事実上A・スミスがここで言っているのは、諸商品の価値はそれらに含まれている労働時間によって規定されており、商品所持者の富は彼の自由になる社会的労働の量のうち存する、ということに他ならない。」（『剰余価値学説史』、マルクス・エンゲルス全集、大月書店 {以下全集と略記する} 26-1, 57頁）

有江氏は、上のマルクスの見解を次のように批判される。「第一に、商品価値を規定する労働の性格を、当事者意識の枠内に留まるスミスの『労苦と骨折』たる私的諸労働から社会的労働へと転換させている点である。スミスが『等量の労働の価値を含んでいると見なされるものと交換する』と言うとき、それはマルクスの言うように、異なる私的諸労働が等しい価値を持つと当事者相互の主観において同等視されるに過ぎない。それをマルクスは、同等視には所有・分業・交換という社会関係の媒介が基礎にあると見る。私的諸労働が社会関係に媒介されて社会的労働の等しい投下量相互の等量として『客観的』に現れると見なすのである。

第二に、商品価値と労働との連関を、当該商品への社会的労働の投下量による当該商品自身の価値規定の関係として把握し、同時にその社会的労働が当該商品に『含まれて

いる』と見る点である。スミスの『価値』は基本的には交換関係の中での他の財貨に対する購買力(交換価値)であり、労働は富の源泉であっても『本来の購買代金』に他ならず、あくまで交換関係における特殊な尺度財であってリカードゥのように当該生産物に『入り込む』(enter into) ものとはとらえられてはいない。それをマルクスは一面でリカードゥ的見地を採用しつつ他面で『含まれている』労働を社会的労働と見るのである。』(『労働と正義』、創風社、1990年、287-288頁)

まず「第一」の問題から検討しよう。見られるように有江氏は、マルクスが「商品価値を規定する労働の性格を、当事者意識の枠内に留まるスミスの『労苦と骨折り』たる私的労働から社会的労働へ転換させている」とマルクスを批判されるのであるが、しかしマルクスはここで「商品価値を規定する労働の性格」を論じているであろうか。マルクスがここで主題としているのは価値ではなく富である。マルクスは、スミスがここで社会的分業の形成とともに富の性質に変化が生じること、つまり富はもはや生産者自身の生産物にあるのではなく、それが支配する他人の労働の量のうちにあることを指摘している、と論じているのである。したがって、氏がマルクスを批判されるのであれば、マルクスが指摘している富の性質の変化が正しいのか否か、まずこの問題を論ずべきであろう。しかし、氏はこの肝心の問題については一言も論じていないのである。したがって、氏のマルクス批判は的外れの批判であると言わなければならない。これによって、氏のマルクス批判についてはこれ以上言及する必要はないわけであるが、しかしそれでは氏の論文をながながと引用したことが無駄になってしまうので、マルクスがここで「商品価値を規定する労働の性格」を論じていることにして、その批判の内容を見ていくことにしよう。氏は「当事者意識の枠内に留まるスミスの『労苦と骨折り』たる私的労働」をマルクスが「社会的労働へ転換させ」たとしてマルクスを批判されるわけであるが、はたして批判されなければならないことなのだろうか。氏は別の箇所ですべて述べている。マルクスには「明らかに解釈上の飛躍がある。なぜならスミスが価値の原因と見なした労働、あるいは尺度と見なした支配される他人労働は、個々の当事者の『労苦と骨折り』であったのに対し、マルクスは他人労働をただちに社会的労働と言い切っているからである。」(同上書、286頁)

要するにスミスの言う「他人労働」をマルクスが「社会的労働」と言い換えたことに「解釈上の飛躍がある」とマルクスを批判されるわけであるが、どこに「解釈上の飛躍」があるのか皆目理解できないのである。「他人労働」の生産物は私の欲望の対象となっており、私の労働の生産物と等置＝交換の関係をとり結んでいるのであり、したがって「他

人労働」の生産物は、「私の労働の生産物」と直接に交換されうる生産物となっているのであり、そのことによって「他人労働」は社会的分業の一環を構成するものとなっている、すなわち社会的労働となっているのである。ここでは、マルクスは私的労働が如何にして社会的労働になるかについては、つまり「商品価値を規定する労働の性格」については立ち入って論じることなく、商品生産者の富は自分の生産物からなるのではなく、それが支配しうる他人の労働の量＝社会的労働の量からなると言っているにすぎないのである。もちろん、スミスは、氏の言われるように「当事者意識の枠内に留まる」「労苦と骨折り」という同質性において、自分の労働と他人の労働を等置している。マルクスの言葉で言えば「社会的過程が等しくない労働のあいだで強制的になしとげる客観的な均等化を、個人的労働の主観的同権化と誤認している。」（『経済学批判』、全集13巻、44頁）しかし、スミスがどのような方法で労働と労働を等置しようと、富が他人の労働、つまり社会的労働からなるということを指摘していることは疑いようのない事実である。また、氏は「同等視には所有・分業・交換という社会的関係の媒介が基礎にあると見る」と述べ、ここにも「解釈上の飛躍」があるかのように言われるが、これもまた途方もない批判である。「所有・分業・交換という社会的関係」を「媒介」にして、つまり分業から生じる「商業社会」の成立を媒介にして富の性質の変化を論じているのはスミス自身であり、そしてマルクスはこの点にスミスの卓越した見解を見ているのである。

第二の問題について。

氏は、「スミスの価値は、基本的には交換関係の中での他の財貨に対する購買力（交換価値）」であり、労働が生産物の中に「含まれている」あるいは「入り込む」ものではない、と主張されるが、果たしてそうであろうか。「基本的には」と言われているところを見ると「基本的」ではないところではスミスも「含まれている」あるいは「入り込む」と考えていたと解釈してよいようであるが、しかしこれは措くことにしよう。先の引用において、スミスは「それらは一定量の労働の価値をふくみ（contain）、それをそのときに等量の労働のふくむ（contain）と考えるものと交換する。」と述べている。「労働の価値」というのは、スミスにおいては、安楽・自由・幸福の犠牲を意味し、そしてその犠牲の大きさは労働量に比例するのである。したがって、生産物に「含まれる」労働の価値というものは、労働量であると捉えてもスミスの真意に反しない。スミスは、『国富論』第二編第三章において次のように述べている。「製造工の労働は、ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりするのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも、すくなくともしばらくのあいだは存

続するものなのである。」(WN, I, p. 313.) この叙述は、有江氏のスミス解釈に痛烈な一撃を与えられると思われるのであるが、しかし、スミスのこの叙述は「比喩的な表現」(同上書、187頁)であるとして、スミスにおいては、労働が商品に「入り込む」という考えはなかった、と頑張られるのである。しかし、上のスミスの叙述は決して「比喩的な表現」ではない。労働が「商品に固定し、実現する」か否かは、彼の生産的労働と不生産的労働の区別にとって重要な意味をもっているのである。また、氏は、「『労働が価値を生み出す』ということ『価値源泉論』と言うとしたら少なくともこのパラグラフに『価値源泉論』は存在しない」(同上書、166-167頁)と述べられる。なるほど、このパラグラフには労働が価値を生み出すという明確な叙述はない。しかし、すでに述べたように、労働は安楽・自由・幸福の犠牲を意味し、したがって生産物はかかる犠牲＝労働を含むものとして価値をもつと考えるのはリーズナブルな解釈であろう。スミスは職人たちが原料に価値を「付加する (add to)」(WN, I, p. 50.)と述べている。労働が「価値を生み出す」からこそ「付加する」ことができるのである。以上によって、氏の主張はほぼ完璧に破綻しているはずであるが、次のスミス叙述が最後の駄目を押すであろう。「前者(対象の価値を増加させる労働——原田)は、それが価値を生み出すために (as it produces a value) 生産的労働とよばれる。」(WN, I, p. 313. 傍点—原田)

注

- (1) スミスがここで工場内分業に言及していることから、羽鳥氏はスミスが『国富論』第一編第四章で述べている分業が徹底して確立された「商業社会」は「単純商品生産社会ではなく資本主義的商品生産社会とみなさなければならないだろう。」(前掲書、56頁)と主張される。スミスは「商業社会」では商品価値は投下労働によって規定されるとしているのであり、そして氏も「スミスは第五章の第七パラグラフのなかで、投下労働＝価値規定説を提出していた。」(同上書、67頁)としてこれを認められている。ところが氏は、「スミスをして投下労働＝価値規定説の適用範囲から資本制社会を排除させることになる」(同上書、68頁)と主張される。氏においては、「商業社会」＝「資本主義的商品生産社会」であり、そしてスミスは、「投下労働＝価値規定説の適用範囲から資本制社会を排除」しているのであるから、「投下労働＝価値規定説の適用」される「社会」がなくなってしまうのである。
- (2) スミスはここでは商品の価値をもって富としているのであるが、しかし、この捉え方で首尾一貫しているわけではない。「…ヨーロッパの実質的富、つまりその土地および労働の生産物の増加…」(WN, I, p. 238.)、あるいは「…一国の実質的富、つまりその土地および労働の年々

の生産物…」(WN, I, p. 241.) というように生産物をもって富とする場合もあれば、「…全国の土地および労働の年々の生産物の価値、つまりその住民の実質的富と収入…」(WN, I, p. 321)、 「…その国土地および労働の年々の生産物の交換価値、つまりその国のすべての住民の実質的富および収入…」(WN, I, p. 320.) 「…一国の実質的富および収入をどのようなものと想像するにしてもすなわち、平明な道理が指示しているように思われるとおり、その国の土地および労働の年々の生産物価値と想像するにしても…」(WN, I, p. 323.) というように生産物の価値をもって富とする場合もある。

- (3) 久留間鮫造氏は、リカードやマルクスの解釈について「経済学的常識からみれば最もリーズナブルな解釈、あるいはむしろ唯一可能な解釈であるが、しかしスミスの真意を究明する点においては必ずしも十分であるとはいわれない。」(『経済学史』、岩波書店、1954年、97-98頁)として、次のように述べている。

「スミスが、労賃と交換される商品としての『労働』を、生産に必要な労働——価値を形成する実体であり価値の内面的な尺度あるところの労働——と混同し、後者についてののみいわれうることを前者についてもいわれうるかのように思いちがえたということは、それ自体としてはもちろんまちがいのない事実であるが、しかしさらに立ち入って考えてみると、それよりも前に、彼は生産過程そのものを、賃労働と労賃との交換の関係から類推して歪曲した形で把握していたことが知られるのである。すなわち彼は、生産過程そのものをば、人間と自然との間の交換の過程として、労働をば、この交換において各人が支払うところの『最初の価格 (the first price)』——各人が財貨の獲得のために支払わねばならぬ本源的な犠牲——として、そして生産物をば、この労働に対して与えられる『自然的報酬または労賃』として把握すると同時に、すべての生産物は、右の交換において各人によって支払われる『最初の価格』——『彼の安楽と自由と幸福との犠牲』ないしは『労役と苦心』としての労働——にしたがって評価され、それに比例して交換されるのが『自然』であるとし、かくして、『すべての商品の真実の価格』たる労働こそは『交換価値の真実の尺度』であり、したがってまた不変の価値尺度だといっているのである。」(同上書、98頁)

まことにスミスに内在した解釈であり、これによってスミスの混乱した主張のなかに一貫した理解を得ることができるのである。

- (4) スミスには、生産的労働と不生産的労働の区分において、雇用者に利潤を生産するか否かという区分のほか、価値を生産するか否かというもう一つの区分が存在する。後者の区分は、物的財貨の生産における労働のように、労働が「売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したり」(WN, I, p. 313.) するか、それとも歌手やダンサーの労働のように「そ

れがおこなわれるまさにその瞬間に消滅してしまう」(WN, I, p. 314.) かの区分に帰着する。したがって、「売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したり」するかどうかは、彼の生産的労働の規定において重要な意味をもっているのである。

2 貨幣について

(1) 貨幣の形成について

スミスは貨幣の形成について次のように述べる。

「ある人はある一定の商品を自分自身が必要とする以上に所有しているのに、もう一人の人はそれ以下にしか所有していない、と仮定しよう。その結果、前者はこの余剰物の一部分をよろこんで処分するであろうし、また後者もそれを購買するであろう。けれども、もしこの後者がたまたま前者の必要とするものを一物も所有してないならば、かれらのあいだにはどのような交換もおこなえないであろう。肉屋はその店に自分が消費しうるよりも多くの肉をもっており、しかも酒屋とパン屋のおのおのは、その肉の一部分を購買したいと思っている。ところが、かれらはそれぞれの職業の異なる生産物以外には、交換に供すべき一物もなく、しかも肉屋は、自分がいますぐ必要とするくらいのパンやビールはすでにその全部をととのえているのである。このばあい、かれらのあいだにはどのような交換もおこなえないであろう。かれがかれらの商人になることも、またかれらがかれの顧客になることも、ともにできないであろうし、そこでかれらのすべては、たがいにあまり役立たないということになる。このような事態の不便を避けるために、分業が最初に確立されたのち、社会のあらゆる時代のあらゆる慎慮の人は、自分自身の勤労に特有な生産物のほかに、あれこれの一商品の一定量、すなわち、たいいていの人がそれとかれらの勤労の生産物とを交換するのを拒むまいとかれが考えるようなあれこれの一商品の一定量を、いつでも自分の手もとにもっているというような仕方、自分が当面する問題を処理しようと自然に努力したにちがいないのである。」(WN, I, pp. 24-25.)

スミスは商品の交換関係の特徴を理解していない。彼は、商品の交換関係を欲望の関係、あるいは使用価値の関係としてしか捉えていない。彼は二人の商品所有者が互いに必要とするものを所有していれば直ちに交換が成立するかのよう述べているが、しかし、そういうことはありえない。互いに必要とするものを所持していても、次にそれら

がどれだけの量的割合で交換されるかという問題が残る。量的比較は、言うまでもなく質的同一性を前提する。異なる商品が同じ質のものに還元され、それから量的比較が行われなければならない。すでに見たように、スミスはこの同質性を後に価値＝労働において捉え、この同質性において量的比較を行っている。彼は、貨幣を論じる前に、まずこの問題を論じるべきであった。したがって、彼の貨幣論は価値論なき貨幣論なのである。

彼は、交換の矛盾を、商品所有者たちは「たいていの人がそれとかれらの勤労の生産物とを交換するのを拒むまいとかれが考えるようなあれこれの一商品」を自分の手もとにおくことによって解決したと言うのであるが、しかし貨幣は「たいていの人がそれとかれらの勤労の生産物と交換するのを拒」まない商品であるから、スミスの説明は貨幣の存在を前提して貨幣の成立を説明することにほかならない。

さて、貨幣は「たいていの人がそれとかれらの勤労の生産物とを交換するのを拒」まない商品であるから、他のあらゆる商品と直接的交換可能性もつ商品として捉えられているわけであるが、しかし彼は直接的交換可能性のもつ重要な意味を理解していない。貨幣が形成されると、商品交換は販売と購買の二つの過程に分裂するが、しかし、スミスにはこの二つの過程が異なった過程であるということについての明確な認識はない。スミスは「われわれは、貨幣さえもっておれば、他のどのような商品によるよりもいっそうたやすく、われわれが必要とするおよそどのようなものでも獲得することができる。われわれがつねに当面する問題は、この貨幣を手に入れるということである。それさえ、獲得すれば、その後なにを購買するにしても困難はまったくない。」(WN, I, p. 396.)と述べ、販売と購買が異なった質のものであることを指摘する。ところが、これと矛盾することを次のように言うのである。

「自国にぶどう園の全然ない国がそのぶどう酒を諸外国からとりよせるのと同じように、自国に鉱山の全然ない国は疑いもなくその金銀を諸外国からとりよせなければならない。それにもかかわらず、政府の注意が前者の対象よりも後者のそのほうへ、より多くむけられる必要があるとも思われぬ。ぶどう酒を買う手段をもっている国はいつでも必要とするぶどう酒を獲得するであろうし、また金銀を買う手段をもっている国がこれらの金銀にふそくすることはけっしてなからう。」(WN, I, p. 401.)

ここでは金銀＝貨幣とぶどう酒は等質の商品として、したがって販売も購買も等質の過程として把握されており、販売が「商品の命がけの飛躍である」ということの認識はまったくない。普通の商品も貨幣と同様直接的交換可能性をもつならば、貨幣を蓄蔵す

ることの意味はなくなってくる。したがって、スミスにとっては、貨幣の蓄蔵は「日常消費される食料品を調理するのに必要とする以上のつぼやなべをもっていること」(WN, I, p. 406.) と同じくらいばかげたことなのである。すでに見たように、スミスは富を他人の労働の生産物に対する支配力として捉えた。しかし、貨幣が形成されると、商品はそれ自体としてはそうした支配力をもたずに貨幣の形態ではじめて支配力をもつことになるのであるが、しかしスミスはこのことに気付かないのである。

スミスにおいては、貨幣は他のすべての生産物と直接的交換可能性をもつ商品であり、そのかぎりでは一般的等価物であると言いうるが、しかし逆に、一般的等価物であるがゆえに直接的交換可能性をもつわけではない。スミスは貨幣も一つの商品であり、価値をもっていること、したがって他の商品と同様一つの価値物であるということは知っているが、しかし、貨幣が商品価値の自立した姿であり、もっぱら価値物としてのみ機能するという見解はもち合わせていない。

では、貨幣がもつ直接的交換可能性は、どこに求められるべきであろうか。この点については中村広治氏の「一般的使用価値」という説明が正しいと思われる。氏は次のように述べる。「貨幣を出現せしめる基盤が、このような困難（商品の価値としての実現から完全にきりはなされて、もっぱら使用価値としての実現の困難——原田）にあるとすれば、スミスにおける貨幣の本質はなにに存するかということは、容易に推定されうであろう。通常は、以上のことからただちに、それは、『商業と交換の一般的用具』、つまりは流通手段たることにある、と説かれている。しかし、これは正当ではあるまい。というのは、上述の貨幣出現の論理にそってすすむならば、スミスにおける貨幣の本質は、事実上、使用価値として万人にみとめられ、欲せられるという意味での、『一般的使用価値』たることにある、というところに帰着せざるをえないからである。すなわち、直接的生産物交換の直面した困難は、個々人の欲望に制約された特殊の使用価値について、交換両当事者間に不一致・齟齬が原則的に生じ、交換の成立をさまたげた点にあった。これを解消する道は、個々人の直接的な欲望には制約されることなく、しかもすべての人々に欲せられる『一般的使用価値』をもった商品の出現にまつほかはない。これこそ、商品を貨幣商品たらしめるもっとも根底的なスミスの規定ということになる。」「スミス貨幣・信用論の研究」、大分大学経済論集15巻第1号、14-15頁）妥当な「推定」であり、スミスにおける貨幣の本質を適確に捉えているということが出来る。⁽¹⁾

(3) 貨幣が富であることを否定するスミスの論理について

スミスは次のように述べている。

「われわれがある特定額の貨幣について語るばあい、われわれは、それを構成する金属片しか意味しないときもあるし、またそれと交換にえられる財貨、つまりその所有がもたらす購買力に対する漠然とした関連をそのなかに含意させるときもある。こういうわけで、われわれが、イングランドの流通貨幣は一千八百万〈ポンド〉と算定されている、というばあい、われわれが意味しているのは、ある著述家がこの国に流通しているものと算定したり、否むしろ想像したりした金属片の総額をあらわそうというだけのことである。しかしながら、われわれが、ある人は一年につき五十ポンドまたは一百ポンドに値する、というばあい、ふつうわれわれは、年々かれに支払われる金属片の総額ばかりでなく、年々かれが購買または消費しうる財貨の価値をも表現しようとしているのである。つまりわれわれは、かれのくらしむきがどのようなものであるか、またはどのようなものであるべきか、いいかえれば、かれが身分相応に満足できる生活必需品および便益品の量および質はどのようなものであるか、ということをつきとめようとしているのである。

われわれが、ある特定額の貨幣によって、それを構成する金属片の総額をあらわすばかりではなく、それと交換にえられる財貨に対する漠然とした関連をも含意させようとするばあいには、それが表示する富または収入は、この同一語によって多少ともあいまいにほめかされている二つの価値の一方だけに等しいのであって、いっそう適切に言えば、前者よりも後者に、つまり貨幣そのものよりも貨幣の値い (money's worth) に等しいのである。

こういうわけで、もしある特定の人がまい週うけとる年金 (pension) が一ギニであるとすれば、かれは一週のあいだに、このギニ貨で一定量の生活資料・便益品および娯楽品を購入することができる。この量の大小に比例して、この人の実質的富、つまりその実質的週収入もまた、大ともなれば小ともなるのである。かれの週収入が、このギニ貨とそれで購買できるものとの双方に等しくないことはたしかなのであって、これらの二つの等しい価値のいずれか一方だけに等しいのであり、いっそう適切に言えば、前者よりも後者に、つまり一ギニ貨そのものよりも一ギニ貨の値いに等しいのである。」(WN, I, pp. 273-274.)

スミスは「富が貨幣あるいは金銀に存するのではなくて、それが購買するものに存し、しかも貨幣は、購買力があるからこそ価値をもつにすぎない」(WN, I, p. 405.) というこ

とを主張するために上に引用したことを述べているのであるが、はたして成功しているであろうか。スミスは「貨幣そのもの」と「貨幣の購買力」、あるいは同じことだが、「貨幣の値い」を分離するのであるが、このこと自体スミスの貨幣把握に深刻な問題があることを示している。言うまでもなく貨幣が貨幣であるのは購買力をもつからである。貨幣の本質は、それが一般的等価物であるということ、言い換えれば、それが直接的交換可能性をもつということにあるのであって、貨幣からこの能力を捨象してしまえば、それは貨幣ではなくそれこそただの「金属片」であるにすぎない。貨幣が富であると主張する重商主義者たちも貨幣が購買力をもつからこそ富としたのであり、「貨幣そのもの」と「貨幣の購買力」を分離して貨幣そのものを富でないとするスミスの批判はまったく無力な批判と言わなければならない。

次に、「貨幣の値い」についてであるが、スミスは、それを貨幣が購買しうる「一定量の生活資料・便益品・および娯楽品」とし、だからこれらの財貨こそが富であるというのである。もちろんこれらが富であるということは誰も否定しないであろうが、しかし、そのことによって貨幣が富であることを否定することはできない。たとえば、1万円の「貨幣の値い」という場合、スミスにおいては、1万円で購買しうる財貨がその「値い」であり、したがってそれらの財貨こそが富であると言うのであるが、しかしその財貨は1種類や2種類の財貨ではなく、1万円で購買しうるすべて種類の財貨でなければならない。したがって、貨幣は富一般を表現しているということになる。スミスはこの重要な事実に気づかないのである。貨幣の形成とともに、富のあり方もまったく変化するのである。マルクスは次のように述べている。「使用価値の面から言えば、どの商品も特殊な欲望にたいするその関係をつうじてただ素材的富の一契機を表現するにすぎず、富のただ個別化された一面だけを表現するに過ぎない。しかし貨幣は、どんな欲望の対象にも直接に転化されうるかぎり、どんな欲望をもみだす。貨幣自身の使用価値は、その等価物をなす諸使用価値の無限の系列のうちの実現されている。貨幣はそのまじりけのない金属性のなかに、商品世界でくりひろげられているいっさいの素材的富を未展開のままにふくんでいる。……金はしたがって素材的富の物質的代理者である。それは、『すべてものの要約』であり、社会的富の概括である。」（『経済学批判』全集13巻、103-104頁）

貨幣は「素材的富の物質的代理者」であるから、貨幣が形成されると富の蓄積も貨幣の形態で行われる。行論で見るように、スミスは富の蓄積をもっぱら素材の形態でのみ捉え、貨幣の形態での富の蓄積はまったく考慮しないのであり、それが誤った非現実的

な資本理論に導くのである。スミスが富の蓄積が貨幣の蓄蔵という形態をとって行われるということを理解することができなかつたのは、彼が、先に考察したように貨幣が直接的交換可能性をもつ商品であるということの意味を十分に理解することができなかつたということに起因している。

注

- (1) スミスにおいては、貨幣の本質は「一般的使用価値」として捉えられていたとする中村氏の見解について武田信照氏は次のように批判される。「このようにみれば、貨幣の本質についても、彼がたんにそれを万人の欲望の対象＝一般的使用価値としてのみとらえ、価値物としての側面を無視しているという評価は正当でないといわなければならない。事実、彼は貨幣としての貴金属の価値に言及しており、その重要性を知ればこそ衡量や試金あるいは悪鋳について語るのである。彼にとって貨幣はただ他商品と同じ価値物であるばかりでなく、同時に一般的使用価値でもなければならぬというにすぎないのである。」(『価値形態と貨幣』梓出版社、1982年、19頁)

中村氏は、スミスが貨幣を「他商品と同じ価値物である」と捉えていることを否定しているわけではないから氏の批判は的外れの批判と言わなければならない。問題は「貨幣の本質」ということにある。氏は「貨幣の本質」について御自身の見解を明確に示されることなく中村氏の見解を批判されるのであるが、この文面から理解するかぎりには、スミスにおいては「貨幣の本質」は「他商品と同じ価値物であるばかりでなく、同時に一般的使用価値でもなければならぬ」ということになるが、しかし「価値物」は、スミスにおいては、「貨幣の本質」を構成するものではない。中村氏は、「貨幣の本質」は直接的交換可能性にあるとしているのである。貨幣が貨幣であるのは、まさにこの機能においてであり、したがって中村氏がここに「貨幣の本質」求めたのはまったく正当であると言わなければならない。では、スミスにおいては、それがどこに求められているかと言えば、「一般的使用価値」以外には考えられないのである。

3 資本について

(1) 分業と資本の蓄積について

スミスは『国富論』第二編の「序論」で分業と資財の蓄積の関係について次のように

述べている。

「分業というものが全然なく、交換もめったにおこなわれず、あらゆる人が独力であらゆる物を調達している未開状態の社会では、その社会の業務をおこなうために、資財 (stock) があらかじめ蓄積されたり (accumulated)、あるいは貯えられたり (stored up) する必要はまったくない。あらゆる人は、自分自身の勤労によって、自分のそのときどきのもろもろの欲望を、それらがおこるままに充足しようと努力する。……

ところが、いったん分業が徹底して導入されると、ある一人の人間の自分自身の労働の生産物は、かれのそのときどきのもろもろの欲望のなかのごく小さい部分を充足しうるにすぎない。もろもろの欲望のはるか大部分は、かれが自分自身の生産物で、またはこれと同一のことであるが、その生産物の価格で購入するところの、他の人々の労働の生産物によって充足される。けれども、この購買は、かれ自身の労働の生産物が完成されるばかりか、売られてしまっただけでおこなうことができるのである。それゆえ、すくなくともこういう二つのことが双方ともなしとげられるときまで、かれを扶養し、かれにその仕事の材料や道具類を供給するにたりるさまざまな種類の財貨の貯量 (stock) がどこかに貯えられていなければならない。織工が自分の特殊の業務に専念できるのは、自分の織物が完成されるばかりか、売られてしまうまでのあいだ、自分を扶養し、その仕事の材料や道具類を供給するにたりる資財が、自分の所有としてであれ他のある人のそれとしてであれ、あらかじめどこかに貯えられているばあいだけである。あきらかにこの蓄積 (accumulation) は、かれがひじょうにながいがいあいだこのような特殊の業務に自分の勤労を充用するのに先立って (be previous to his applying his industry) おこなわれなければならないものなのである。

資財の蓄積は事物の性質上分業に先だたざるをえないから (be previous to the division of labour)、労働もまた、先だっておこなわれる資財の蓄積だけに比例してますます細分されうるのである。」⁽¹⁾ (WN, I, pp. 258-259.)

見られるように、引用した文章は資本の蓄積と分業の関係について述べたものであるが、少なからず問題を含んでいる。スミスは、ここで資財の蓄積が分業に先行しなければならないと述べているが、しかし第一編では資財の蓄積は「分業の結果」として捉えられている。スミスは次のように述べている。「統治がよくゆきとどいた社会では、普遍的な富裕 (universal opulence) が人民の最下層の階級にまでひろがっているのであって、これこそは、分業の結果さまざまな工芸の生産物のすべてが大増殖したためにひきおこされたことなのである。あらゆる職人は、自分自身が必要とする以上に処分しうる

みずからの所産を多量にもっており、またあらゆる他の職人もまさしくこれと同一の立場にあるから、かれは自分自身の多量の財貨を他人の多量の財貨、またはこれと同一のことになるが、他人の多量の財貨の価格と交換することができるのである。かれは、そういう人にその必要とするものを潤沢に供給し、またそういう人は、かれにその必要とするものを十分にととのえてやるのであって、そこで一般的豊富（general plenty）が社会のすべてのさまざまな階級をつうじて行き渡るのである。」（WN, I, p. 12.）

見られるように、あらゆる職人が「自分自身が必要とする以上に処分しうるみずからの所産を多量にもって」いるのは、つまり「財貨の貯量」は「分業の結果」であることが指摘されている。またスミスは初期未開の社会について「分業というものが全然なく、交換もめったにおこなわれず」と述べているが、しかし『国富論』第一編においては、初期未開の社会においても分業と交換が存在するとしているのである。スミスは、分業をひきおこすものは「取引するという性癖なのである」として次のように述べている。

「たとえば、狩猟民、牧羊民の種族のなかで、特定の者が他のだれよりも手ばやく巧妙に弓矢をつくるとしよう。かれは、弓矢をその仲間の家畜やしかの肉としばしば交換し、そうするうちに、けっきょくこういうふうにするほうが、自分で野原にでかけて行ってそれらを捕らえるよりもいっそう多くの家畜やしかの肉を獲得できる、ということを発見するようになる。それゆえ、自分自身の利益に対する顧慮から、弓矢の製造ということがだんだんとかれのおもな仕事になるのであって、そこでかれは一種の武器製造人になる。もう一人は、自分たちの小さい小屋または移動家屋の骨組みや屋根の制作にひいでている。かれはこの方面でよくその隣人に役だち、隣人はまた同じようにしてかれに家畜やしかの肉を報酬としてあたえ、そうするうちに、かれはこの仕事に献身するのが自分の利益だということをさとるようになり、そこで一種の家大工になる。同じようにして、第三の者はかじ屋か真鍮細工人になり、第四の者は野蛮人の衣服の主要部分をなしている生皮またはなめし皮のなめし屋か仕上屋になる。」（WN, I, p. 17.）

ここで論じられている分業は、仕事の種類からも、また「野蛮人の」という言葉からも明らかなように初期未開の社会における分業である。そしてここにおける分業は、決して資財の蓄積が先行しなければ行われえないというものではない。さらにスミスは、「社会の未開状態においては、家畜が商業の共通の用具であった」（WN, I, p. 25.）と述べており、「商業の用具」＝貨幣の存在すら指摘しているのであり、したがって先に引用した第二編冒頭の叙述は明らかにこれまでの叙述と矛盾していると言わなければならない。言うまでもなく、資本の蓄積は、スミスが述べていることとはまったく反対にかな

り発展した分業としたがって商品流通を前提する。冒頭に引用したスミスの説明は史実に逆らうものであり、したがってこれから見るように、論理的にも、内容的にも多くの難点を含むものとならざるをえないのである。

スミスが、『国富論』第二編において初期未開の社会における分業の存在を否定し、資財の蓄積が分業に先行しなければならないとしたのは、資本主義的生産のもとでの分業の発展——ここでは剰余価値が資本に転化されることによって、つまり資本の蓄積によって新しい企業の出現や生産の拡大が行われる——から逆に類推したものであろう。もちろん資本主義的生産のもとでの分業は、資本の蓄積を前提する。しかし、資財の蓄積を前提するものではない。スミスの蓄積論において特徴的なことは、もっぱら食料や材料や道具の蓄積を問題とし、貨幣の蓄積にまったく触れていないということである。

スミスが資財の蓄積が分業に先行するというとき、その根拠は、生産者が生産物を売却し、自分が必要とする生産物を獲得するまでに時間がかかるから、その間生産者と生産者の仕事を維持するのに必要な資財が蓄えられていなければならないということであった。もちろん、生産は生産者の食糧や道具や機械や原材料なしには生産されないから、それらがあらかじめ蓄積されていなければならないというスミスの主張は正しいように思われるが、資本主義的な生産のもとではスミスの想定するようには進行しないのである。新たな分業の出現や生産の拡大は資財の蓄積を前提するというスミスの主張は、生産が計画的に営まれる社会には当てはまるであろうが、生産が無政府的に行われる資本主義的な生産のもとでは一般的にはありえないことである。

たとえば、一万着のズボンを生産する企業を新しく起ちあげると仮定しよう。スミスにしたがえば、一万着のズボンを生産するのに必要なミシン、布、糸、それからそれらを使用する労働者の食料等が「自分の所有としてであれ他のある人のそれとしてであれ、あらかじめどこかに貯えられて」いなければならないということになる。この主張の誤りを明らかにするために、われわれは、わざわざスミスの時代にまでさかのぼる必要はないであろう。現代においてそれがどのように行われているかを見ればよい。ズボンの生産者は、必要な資財を市場で購入する。だから必要なのは、それらを購入する貨幣なのである。新しい需要が形成されたために、供給が直ちにそれに対応できなければ、市場に攪乱が生じるであろう。ミシンや布や糸の価格は騰貴するであろう。あるいは、供給が絶対的に不足し、それらを手に入れることができない場合も生じうるであろう。しかし、いずれ需要に応じた供給が準備されていくであろう。資本主義的な生産のシステムのもとでは、需要と供給の絶えざる変動を通じて資財が準備されていくのであり、必

要な資財があらかじめどこかに貯えられて、それから生産が行われるというものではない。⁽²⁾ スミスは、すでに見たように蓄蔵貨幣の役割を否定したために、資本の出発点に資財の蓄積を置かなければならなかったのである。

(2) 資財の資本への転化について

スミスは資材の資本への転化について次のように述べている。

「ある人が所有する資財が、その人を数日あるいは数週のあいだしか扶養するにたりないばあいには、かれはそれから収入 (revenue) をひきだそうなどとはめったに考えないものである。……

しかしながら、この人が、数ヶ月または数カ年のあいだ扶養するにたりる資財を所有するばあいには、かれは、その大部分から収入をひきだそうと自然に努力し、自分の直接の消費のためには、この収入がはいるようになるまで自分を扶養しうるだけのものを留保しておくのである。それゆえ、かれの全資財は、二つの部分に区別される。すなわち、かれが自分にこの収入をもたらしてくれるものと期待する部分は、かれの資本とよばれる。」(WN, I, p. 261.)

見られるように、蓄積した資財から収入を引き出そうとする部分が資本と規定されている。資本の出発点に資財の蓄積を据えることの欠陥がここでもあらわになる。「数ヶ月または数カ年のあいだ扶養するにたりる資財を所有」することなど考えられるであろうか。たとえば、穀物や野菜や肉等を数年分蓄積し、それからそれらを利用して「収入ひきだそう」とする者は、スミスの頭の中にしか存在しないであろう。マルクスは、「蓄財のつもりで商品を蓄積するのは、ただの愚行であろう。大量の商品の蓄積は、流通の停滞か過剰生産かの結果なのである。」(『資本論』、全集23巻b、767頁)と述べている。さらにスミスは、資財を所有する者は、「その大部分から収入をひきだそうと自然に努力」と述べるが、これも説明の困難を糊塗するものでしかない。なんの脈絡もなくいきなり「収入」という概念が登場してくるのである。スミスは現実の資本主義的生産を前提して、つまり資財から利潤や地代などの収入が引き出されていることを前提して、それを過去にそのままもち込んでいるのである。⁽³⁾ これは、資本を前提して資本を説明ものである。資本の出発点に資財の蓄積を置く限り、このような同義反復的な説明に陥らざるをえないのである。

しかし、その前にどうして人は「数ヶ月または数カ年のあいだ扶養するにたりる資財」蓄積するようになるのであろうか。スミスはこれを人間の「本能」から導き出してい

る。スミスは、次のように述べている。「ところが、貯蓄するように人をかりたてる本能 (principle) は、われわれの生活状態をよりよくしようとする願望であり、それは総じておだやかで冷静なものではあるけれども、母親の胎内からわれわれに同行して来たものであり、しかもわれわれが墓にはいるまでけっしてわれわれからはなれないものである。」(WN, I, p. 323.) もちろん、人間にこのような「本能」が存在するわけではない。これもスミスが資本主義的生産のもとで行われている事実、つまり剰余価値の資本への転化を、過去に投影したものである。スミスはこのように資財の蓄積を人間の「本能」から導き出し、そして蓄積の行為=節儉を富の本源にするのである。スミスは次のように述べている。「勤労ではなく、節儉が資本増加の直接原因である。実際のところ、勤労は節儉が貯蓄する対象物を調達する。けれども勤労がたとえどのようなものを獲得しようとも、節儉がそれを貯蓄し貯蔵しないならば、資本は増加しようにもけっしてできないであろう。」(WN, I, p. 320.)

『国富論』冒頭では労働が富の本源 (fund) であった。ところが、資本の蓄積を論じた第二編では次のように述べる。「儉約家が年々に貯蓄をすれば、かれは貯蓄したものによってその年またはその翌年のための生産的な人手の追加数を扶養するばかりでなく、公設の仕事 (a public workhouse) の設立者のように永久的な資源 (a perpetual fund) を設定するのである。」(WN, I, p. 321.) 最初は、労働が国民を「扶養する」fundであったのに、ここではそれが「貯蓄したもの」=資本に転換されるのである。したがって、資本の増大が富の増大の決定的な要因となる。スミスは『国富論』の冒頭において国民の豊かさを規定する事情として労働の生産力の高さと生産的労働者の数を挙げ、そして資本の蓄積は後者のみを規定する要因として指摘していた。ところが、第二編では、資本の蓄積は労働の生産力の高さと生産的労働者の数の両方を規定する要因に変更されるのである。彼は次のように述べている。

「ある国民の土地および労働の年々の生産物は、その生産的労働者の数を増大するか、または以前から使用されている労働者の生産諸力を増加するかはのいずれかとする以外には、その価値を増加することがけっしてできない。その生産的労働者の数が、資本の増加の結果として、すなわち、かれらを扶養するために予定された基金の増加の結果として増加する以外にはけっして大いに増加しえないことは明白である。同数の労働者の生産諸力の増加は、労働を促進したり短縮したりするもろもろの機械や用具を多少とも増加し改善するかまた仕事をいっそう適切に分割し配分するか、のいずれかの結果としてでなければ増加しえない。いずれのばあいにも、追加的な資本がほとんどつねに必要と

される。ある事業の企業家が自分の職人たちによりよい機械類をあてがうことができるのも、またはかれらのあいだにいつそう適切に仕事を配分やれるのも、いずれにせよ追加的な資本を媒介してのことである。」(WN, I, p. 325.)

人間＝労働者が生活手段と生産手段の生産を増大し、それによって労働者の数を増大し、労働の生産性を増進していくことが、資本主義的生産のもとでは「追加的資本」の役割になるのである。生きた労働と対象化された労働（過去の労働）が対立させられ、対象化された労働の優位性が強調されているのである。まことに「ブルジョア社会では過去が現在を支配」（『共産党宣言』、全集4巻、489頁）するのである。

以上見てきたように、富の源泉が労働から資本の蓄積に、したがってその蓄積を推し進める資本家の「節儉」という行為に移されるわけであるが、富の源泉についてのこの移行は、どのようにして生じたのであろうか。これは、資本主義的生産に固有の主客の転倒に根拠を有すると言わなければならない。主客の転倒は、上に引用したスミスの叙述にも見られるが、これについて彼はさらに明白に次のように述べている。

「直接の消費のために留保されうる資財を維持し増加すること、これが固定資本と流動資本との双方の目標であり、目的である。この資財こそ、人民を食べさせ、着せ、住まわせるものである。人民の貧富は、これらの二つの資本が、直接の消費のために留保される資財に供給するその供給が潤沢か貧弱かに依存するのである。」(WN, I, p. 266.) スミスはまた度々「資本が生産的労働を活動させる」(cf. WN, I, pp. 343-344.)とも述べる。

人間が「資財」を生産し、それを「食べ、着、住む」等によって生存していくのではなく、資財が主体となり、「資財こそ、人民を食べさせ、着せ、住まわせる」のである。ここに「資財」＝物象が人格化し、「人民」が物象化するという主客の完全な転倒が存在するのであるが、しかしこれは決してスミスの誤った判断ではなく、資本主義的生産のもとでは客観的な現象形態であり、スミスはそれをあるがままに表現しているのである。スミスが批判されるべきは、これを無批判に受け入れ、この転倒を転倒として理解していないということである。資財が「人民を食べさせ、着せ、住まわせる」のは、資財が「人民」から切り離されているからである。もし、資財が人民自身の所有になるならば、資財が「人民を食べさせ、着せ、住まわせ」たり、「資本が生産的労働を活動させる」というような転倒した事態は生じえない。

スミスは「労働の賃銀」と題する『国富論』第一編第八章においては上に引用した文章とほぼ同じ文章で、しかし正反対のことを、次のように論じている。「成員のはるか大部分がまずしくもみじめであるのに、その社会が隆盛で幸福であるはずも断じてな

い。そればかりではなく、人民全体を食べさせ、着せ、そして住ませる人々が、自分自身もまたかなり十分に食べたり、着たり、そして住んだりしうるだけの、自分自身の労働の生産物の分け前にあずかるということは、まったく公正というほかはないのである。」(WN, I, p. 80.) 見られるように、ここでは「人民全体を食べさせ、着せ、そして住ませる」のは労働者である。ところが資本の蓄積を論じる第二編においては、それが「資財」になるのである。スミスはこの矛盾に気付かないのである。

以上見てきたように、スミスは資本主義的生産に特有の物象の人格化、人格の物象化をあるがままに叙述するのであるが、しかし他方では、その本質的諸関係も明らかにする。スミスは、次のように述べている。「労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる部類のものと、このような結果を全然生まない別の部類のものがある。前者は、価値を生産するのであるから、これを生産的労働と呼び、後者はこれを不生産的労働と呼んでさしつかえない。こういうわけで、製造工の労働は、一般に、自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する。これに反して、召使いの労働はどのような価値も付加しない。なるほど、製造工は、自分の賃銀を自分の親方からまえ貸してもらってはいるけれども、こういう賃銀の価値は、一般に、自分が労働を加えた対象の増大した価値のうちに利潤をともなって回収されるのであるから、実は主人にはなんの費用もかからない。ところが、召使いの生活維持費はけっして回収されないのである。人は多数の製造工を使用することによって富み、多数の召使いを扶養することによって貧しくなる。」(WN, I, p. 313.)

ここには、「価値を生産する」労働をもって生産的労働とする誤った見解も見られるが、しかしこれは彼の主要な見解ではない。スミスは製造工の労働は「自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する。」とし、これを生産的労働としている。スミスは、資本家が受け取る「利潤の価値」が、労働者が受け取る「労賃の価値」を超えて行われる剰余の労働から生じることを明らかにしているのである。言い換えれば、親方の資本を増大させる労働をもって生産的労働、すなわち富を生産する労働としているのである。しかし、この富を生産する労働者=生産的労働者も結局は資本によって扶養される存在となるのであり、したがってここにも一つの転倒が生じるのであるが、スミスはこの矛盾に気付かないのである。また、スミスは、労働者がなぜ資本家のために剰余の労働をせざるをえないのかをその根拠を明らかにしない。スミスにおいては、剰余の労働は労働の生産性の高さから生じるものであり、そしてその労働の生産性の高さは分業の発展がもたらしたものとして捉えるの

である。しかし、労働の生産性が如何に高かろうと労働者が自分自身の維持・再生産に必要な財貨の生産で満足し、それ以上の労働をしなかったら剰余労働は存在しない。労働者が、自分自身の維持・再生産に必要な労働を超えて資本のために剰余の労働をせざるをえないのは、労働者が生産手段から、したがって生活手段から分離されているからである。労働者は生きていくためには、彼が所有する唯一の商品＝労働力を販売せざるをえず、労働力の使用を資本家の指揮の下に委ねざるをえないからである。言い換えれば、労働が賃労働として行われざるをえないからである。この生産関係のもとでのみ、資本は「生産的労働を活動させる」ものとして、つまり、生きた労働と交換され、それを吸収・搾取することによって自己増殖する価値として機能するのである。したがって、資本は「そもそも賃労働の契機を対立的に自分のなかに含む」（『資本論草稿集』①、大月書店、405頁）のであり、資本はこの関係の自立化した、物象化した存在なのである。

スミスは労働者の生産手段からの分離、これを歴史的に独自の社会的生産の関係としては捉えるのではなく、社会的生産の永遠の自然的形態として捉える。したがって、「資本が生産的労働を活動させる」のも、つまり資本＝物象による人間支配も「自然的形態」として捉えられ、したがってまた、資本＝物象の人格化としての資本家の行為も自然的な行為として把握される。スミスが、資本家の「儉約」＝資本の蓄積を「母親の胎内からわれわれに同行してきた」自然的本能として捉えるのも当然のことである。資本主義的生産を前提すれば、労働は、資本なしには「活動させられる」ことはないのであるから、資本が、したがってそれを形成する「儉約」が富の本源になる。

資本についてのスミスの説明の欠陥は、それについてのマルクスの説明と比較すればより明確になるであろう。マルクスは『資本論』第一巻第二篇「貨幣の資本への転化」の冒頭で次のように述べる。「商品流通は資本の出発点である。商品生産と、発達した商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的な前提をなしている。世界貿易と世界市場とは、16世紀に資本の近代的生活史を開くのである。

商品流通の素材的な内容やいろいろな使用価値の交換は別として、ただこの過程が生み出す経済的な諸形態だけを考察するならば、われわれはこの過程の最後の産物として貨幣を見いだす。この商品流通の最後の産物は、資本の最初の現象形態である。」（『資本論』全集23巻a、191頁）

「商品流通の最後の産物としての」貨幣は蓄蔵貨幣である。⁽⁴⁾ この蓄蔵貨幣が流通に投じられ再び貨幣となって環流してくる運動、すなわち貨幣の商品への転化と商品の貨幣への再転化＝G—W—Gの運動、この運動によって貨幣は資本に転化するのである。

G—W—Gの運動においては、終結点は貨幣であり、したがって貨幣が目的となっており、もっぱら貨幣を流通手段としてのみ捉えるスミスにおいてはこの流通形態は彼の理解かなたにある。貨幣が手段から目的となること、これは、貨幣の資本としての機能において完成する。「貨幣蓄蔵者は気の違った資本家でしかないのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者なのである。」(『資本論』全集23巻a、200頁)

次に、この運動においては、出発点も終結点も貨幣である。したがって、この運動が意味をもつためには終結点の貨幣が最初に投下された貨幣よりも大きいということではなければならない。すなわち、G—W—GはG—W—G'でなければならない。流通に投じられることによって価値を増殖する貨幣、この運動は価値自身の運動であり、したがって、資本は自己増殖する価値である。しかし、スミスにおいては、資本は自己増殖する価値ではなく、収入から貯蓄されたものであり、したがって、「もろもろの資本は、節儉 (parsimony) によって増大し、浪費と不始末によって (prodigality and misconduct) によって減少される。」(WN, I, p. 320.)資本家は「儉約家 (frugal man)」(WN, I, p. 323.) にほかならない。しかし、スミスの言う「節儉」は剰余価値の資本への転化のことであり、そしてこれは資本家＝儉約家の個人的な行為ではない。それは「社会的な機構の作用なのであって、この機構のなかでは、彼は一つの動輪でしかないのである。」(『資本論』、全集23巻b、772頁) スミスは「節儉」＝資本の蓄積を「社会的な機構の作用」として捉えることができず、そして次に見るように、彼が株式会社に低い評価しか与えないのはここに起因するのである。

(3) スミスの株式会社論について

いずれの資本主義国においても株式会社は、企業の主要形態となっており、資本主義的生産は株式会社の形態において発展してきたのである。しかし古典派経済学の創始者スミスは、株式会社に強い不信と疑念をもっており、資本主義的生産が株式会社の形態で発展するということは、彼にとっては思いもよらないことだったのである。まず最初に、スミスが株式会社をどのように捉えているかを見ておくことにしよう。

「株式会社 (Joint stock companies) は、それが国王の特許上によって設定されたものであれ議会の法令によってそうされたものであれ、いくつかの点において規制会社 (regulated companies) と異なるばかりではなく、合名会社 (private copartneries) とも異なっている。

第一に、合名会社においては、どのような社員も、会社の同意がないかぎり、自分の

持分を別人に譲渡すること、つまり新社員を入社させることができない。けれども、各社員は、適正な予告をしたうえでなら、退社して、共同の資本についての自分の持分の払戻しを会社に請求しうるのである。これに反して、株式会社においては、どのような社員も、自分の持分の払い戻しを会社に請求することができないが、各社員は、会社の同意がなくても、自分の持分を別人に譲渡し、それによって新社員を入社させることができる。株式資本の持株の価値は、つねにそれが市場でもたらすであろう価格であって、この価格は、株主がこの会社の資本に対してもつ債権の金額よりも、なんらかの割合において大きいこともあるし、小さいこともある。

第二に、合名会社においては、各社員は会社が契約した債務について自分の財産の全額までの義務を負っている。これに反して、株式会社においては、各社員は自分の持株の大きさを限度とする義務を負うにすぎない。

株式会社の事業は、つねに取締役会によって運営されている。」(WN, II, p. 232.)

見られるように、スミスは株式会社を①株式の自由譲渡、②持ち株に応じての有限責任、③取締役会による事業運営、つまり会社機関の設置によって特徴づけている。この特徴づけは、そのまま現代の株式会社に当てはまる。しかし、株式会社についてのスミスの評価はきわめて厳しいのである。スミスは先の引用に続けて次のように述べている。

「もっとも、取締役会は、多くの点で株主総会から統制されることがしばしばある。けれども、株主の大部分は、会社の業務についてなにごとかを知らずとはめったに主張しないものであって、自分たちのあいだに党派心でもはびこらぬかぎり、会社の業務の世話などはやかず、取締役が適当と考えておこなう半年または一年ごとの配当をうけとり、それで満足しているのである。」(WN, II, p. 232.) さらに次のように続ける。「このような会社の取締役たちは、自分自身の貨幣というよりも、むしろ他の人々の貨幣の管理者なのであるから、合名会社の社員がしばしば自分自身の貨幣を監視するのと同一の小心翼翼さで他の人々の貨幣を監視することをかれらに期待するわけにはゆかない。富者の執事のように、かれらは小事に注意すると主人の名誉にはならぬと考えがちで、注意を怠るのをなんとも思わない。それゆえ、このような株式会社の業務や運営には、怠慢や浪費が多かれすくなかれつねにはばをきかせざるをえない。」(WN, II, p. 233.)

すでに見たように、スミスは節儉を人間の「本能」として捉え、これを「母親の胎内からわれわれに同行して来たものであり、しかもわれわれが墓にはいるまでけっしてわれわれからはなれないものなのである。」と強調し、そしてこの「本能」を「金を使う

という本能」と比較し、「大部分の人々についてその全生涯をつうじての平均をとってみれば、儉約という本能のほうが優位を占めているばかりではなく、はなはだしく優位を占めているようにさえ思われるのである。」(WN, I, p. 324.) と述べるのであるが、しかしこの「本能」は「自分自身の貨幣」を管理する者のみに存在し、「他の人々の貨幣の管理者」は決してもち合わせることもない本能なのである。したがってこの「本能」は、資本所有者の本能であり、「大部分の人々」の本能でないことを、スミス自ら暴露していると言わなければならない。

スミスは、資本主義的企業の運営に必要な支配や管理は、資本家＝所有者の直接的な支配、管理の下に置かれたときにもっともうまく行われると考えているのであるが、それは、先に述べたように、彼が資本の蓄積を「社会的な機構の作用」として捉えることができず資本家の個人的な行為として捉えたことに起因しているのである。スミスは資本家の利潤が労働者の不払い労働からなることを明らかにしたが、しかし資本そのものが不払い労働から成っているという視点をもつことはなかった。それはあくまで儉約によって、したがって流通から生じたものであり、生産過程から生じたものではない。だから、彼は容易に富の源泉を労働から資本に、あるいは資本を形成する「節儉」に移すことができたのである。資本がその所有者の「節儉」から生じたものであれば、それは所有者の直接的な支配と管理のもとでのみ増大されうるとするのは、当然のことである。スミスは「資本が生産的労働を活動させる」と述べた。まさしく、資本は労働と対立し、労働を支配することによってその価値を増殖していくのである。マルクスは次のように述べている。「労働者が生産手段を使うのではなく、生産手段が労働者を使う。そしてそのことによって、生産手段は資本なのである。資本が労働者を使うのである。生産手段は、直接的生活維持手段の形態にあるにせよ、交換手段としてにせよ、商品としてにせよ、労働者にとっては生産物を生産する手段ではない。むしろ、労働者のほうが、生産手段のための、一面では生産手段の価値を保存するための、他面ではその価値を増殖すなわち増大させ剰余労働を吸収するための、手段なのである。

すでに、その簡単な形態において、この関係は一つの転倒、すなわち物の人格化および人間の物化である。なぜなら、この形態を以前のすべての形態と区別するものは、資本家がなんらかの個人的資格で労働者を支配するというのではなく、彼が『資本』であるかぎりにおいてのみこうした支配が生ずるということだからである。彼の支配は、生きている労働にたいする対象化された労働の支配、労働者自身にたいする労働者の生産物の支配にほかならない。」(『剰余価値学説史』、全集26巻I、496-7頁)

資本家は所有者という資格で支配・管理するのではない。支配・管理は資本所有から生じるのではなく、資本自身に淵源するのである。「資本家自身はただ資本の人格化として権力者であるにすぎない。」(同上書、496頁) 株式会社において、所有と経営が分離している場合、経営者が資本の人格化として行動せざるをえないのであって、経営者がスミスの言うように「怠慢や浪費」にふけるならば経営者を解任されるか、競争によってその企業は破綻に追いやられるであろう。

次に、これまでの見解を補強するために、スミスの株式会社について論じている鈴木芳徳氏と武田信照氏の見解を見ていくことにしよう。まず鈴木氏の見解から見ていくことにしよう。氏は次のように述べている。

「スミスは、株式会社を、つねに、個人企業との対比において考える。外国貿易にたずさわる株式会社は、つねに個人冒険者 (private adventurer) との対比において検討される。そして、個人冒険者の不休の努力と注意とは、株式会社にはるかに優越する、とスミスは考える。ここに示される株式会社への不信は、裏がえしていうなら個人としての経済人へのゆるぎなき信頼にほかならぬ。自然人とは区別された法人組織への疑念。経済人の利己的な行為が予定調和的に全体利益を実現すると説くときの、あのホモ・エコノミックスなる主体への賛美と信頼とは、合本組織への不信として示されてくる。」(『株式会社の経済学説』、1983年、新評論、47頁)

見られるように、スミスが株式会社に抱いた不信の根拠として「自然人とは区別された法人組織への疑念」、「個人としての経済人へのゆるぎなき信頼」が指摘されている。しかし、これは奇妙なことと言わざるをえない。なぜなら株式会社といえども、それを現実に運営していくのは、株主にしろ経営者にしろ「自然人」であり、「個人としての経済人」であるからである。また、スミスが「合本組織」一般に不信をもっていたのであれば、それは合名会社に対しても妥当しなければならない。合名会社も「共同の資本」をもって組織された「合本組織」である。しかし、合名会社においては、所有と経営が分離していないから、合名会社の社員は「自分自身の貨幣を監視する」のであり、したがって、スミスは、合名会社にはいかなる疑念も不信も抱いていないのである。スミスが株式会社に不信を抱いたのは、そこでは所有と経営が分離されているということにあるのである。⁽⁵⁾

武田信照氏は次のように述べている。

「資本主義経済の編成原理は所有と支配の一致であり、所有と支配の分離はこの原理の修正・止揚である。スミスが資本主義経済を担うにふさわしい活動主体とみた個人企

業や合名会社は、所有と支配との一致した活動主体である。他方、彼が否定的な評価を与えた大組織としての株式会社では、所有と支配とは分離しがちである。いいかえれば、彼にあっては資本主義経済の編成原理に対応した企業が、同時に資本主義経済を担うにふさわしい活動主体であり、逆は逆なのである。」(『株式会社像の転回』、梓出版社、1998年、50頁)

「所有と支配の一致」が「資本主義経済の編成原理である」ならば、「所有と支配の分離」は「この原理の修正・止揚」ではなく、「この原理」の否定でなければならないはずであり、したがって「所有と支配の分離」を「編成原理」とする経済システムは資本主義経済ではありえないはずである。かつて西山忠範氏は、株式会社においては所有と支配が分離しているので、株式会社が支配する現在の社会は資本主義経済ではないと述べたが、武田氏も論理を一貫させるならば、西山氏と同じ結論に至らなければならないはずである。⁶⁾しかし、これは措くとしよう。氏は資本の「支配」は所有から生じると捉えられているようであるが、しかし、資本はすでに見たように「本来的に賃労働の契機をそれ自身の内に対立的に含んでいる」のであり、資本それ自身が支配力なのである。資本と支配を分離して、資本家は資本の所有に基づいて支配するのであるという捉え方は、結局資本をモノとして捉えているということであり、モノの所有から支配が生じるということである。また、スミスにとっては、「所有と支配の一致」は「資本主義の編成原理」であったかもしれないが、しかし現実の資本主義経済がこのような「編成原理」をもっているわけではない。⁷⁾むしろ反対に、資本主義経済の大きな特徴は、所有を、土地所有であれ、資本所有であれ、生産過程からますます無用のものとして排除していくことにあると言わなければならない。マルクスは土地所有について次のように述べている。

「資本主義的生産様式の大きな成果の一つは、この生産様式が一方では農業を社会の最も未発展な部分のただ単に経験的な機械的に伝承されるやり方から農学の意識的科学的応用に、およそ私的所有とともに与えられている諸関係のなかで可能なかぎり、転化させるということであり、この生産様式が土地所有を一方では支配隷属関係から完全に解放し、他方では労働条件としての土地を土地所有からも土地所有者からもまったく分離して、土地所有者にとって土地が表しているものは、彼が彼の独占によって産業資本家すなわち借地農業者から徴収する一定の貨幣租税以外のなにもものでもなくなるということであり、そして、土地所有者は自分の所有地はスコットランドにあるのに彼の全生涯をコンスタンティノーブルで送ることができるほどまでに関連を切り離してしまうということである。こうして、土地所有は、以前にそれに付着していたすべての政治的

社会的飾りものや混ざりものを捨て去ることによって、要するに、産業資本家たち自身によっても彼らの理論的代弁者たちによっても、後に見るように、土地所有との激しい闘争のなかで無用なつまらない余計なものとして非難されるすべての伝来の付属物を捨て去ることによって、その純粹に経済的形態を受け取るのである。』（『資本論』、全集25巻b、796頁）

また、資本所有についても次のように述べている。「株式会社の形成。これによって、……現実に機能している資本家が他人の資本の単なる支配人・管理人に転化し、資本所有者は単なる所有者、単なる貨幣資本家に転化するという。彼らの受け取る配当が利子と企業者利得とを、すなわち総利潤を含んでいる場合でも……この総利潤は、ただ利子の形態でのみ、すなわち資本所有の単なる報償としてのみ、受け取られるのであって、この資本所有が今や現実の再生産過程での機能から分離されることは、支配人の一身に属する機能が資本所有から分離されるのとまったく同様である。」（『資本論』、全集25巻a、556-557頁）

見られるように、土地所有についても、資本所有についても、資本主義的生産の発展とともに、再生産過程から排除され、土地所有者は地代を、資本所有者は配当を受け取るだけの存在になることが指摘されており、そしてマルクスはここに資本主義的生産の大きな成果を見出しているのである。

注

- (1) マルクスは、スミスの「分業に先行する蓄積」について「資本主義的蓄積に先行する『本源的蓄積』（アダム・スミスの言う先行的蓄積〔previous accumulation〕）、すなわち資本主義的生産様式の結果ではなく出発点である蓄積」（『資本論』、全集23巻b、932頁）と述べている。小林昇氏は、このマルクスの叙述について「しかし、スミスが『国富論』で先行的蓄積というのは(1)には、独立生産者が商品生産者として社会的分業の特化した一端に専心できるための前提条件であり、(2)には、この独立生産者がさらに進んでプロレタリアートを雇いやるための前提条件——そういう意味での蓄積——なのであって、マルクス自身のいう「生産者と生産手段との歴史的分離過程」とはおなじものではない。（『マルクスにおける『国富論』前史』、『講座 資本論の研究』 第1巻、青木書店、1981年、264頁）と述べている。

正しいと指摘だと思われるが、しかしスミスの言う「先行的蓄積」はあくまで「分業に先行する」蓄積であって、資本主義的蓄積に先行するものではない。したがって(1)(2)に加えてさらに(3)として「資本家がプロレタリアート——スミスの言葉で言えば生産的労働者——を

増加するための前提条件」を付け加えるのではなかろうか。スミスは『国富論』第一編第八章で次のように述べている。「……資財の増加は、労働の生産力を増進させ、比較的少量の労働で比較的多量の所産を生産させる傾向がある。多数の労働者を使用する資財の所有者は、自分自身の利益のために、可能なかぎりでの最多量の所産を生産しうるように仕事を適当に分散し配分しようと必然に努力する。同一の理由から、かれは自分か労働者のいずれかが考えおよぶ最善の機械類を労働者に供給しようと努力する。ある特定の仕事場における労働者のあいだでおこることは、同一の理由から、大きな社会における労働者のあいだでもおこる。かれらの数が多くなればなるほど、かれらはますます職業のもろもろの部門や小部門に自分自身を自然に分割する。」(WN, I, p. 88.) 資財が「蓄積されてさまざまな種類の資本になることの諸効果」(WN, I, p. 259.) = 分業の発展は資本主義的生産の成立以後も続いていくのであり、この意味においても蓄積は「分業に先行する」のである。

- (2) マルクスは次のように述べている。「資本主義ではなく、共産主義の社会を考えてみれば、まず第一に貨幣資本は全然なくなり、したがって貨幣資本によってはいつてくる取引の仮装もなくなる。事柄は簡単に次のことに帰着する。すなわち、社会は、たとえば鉄道建設のように一年またはそれ以上の長期間にわたって生産手段も生活手段もそのほかどんな有用効果も供給しないのに年間総生産から労働や生産手段や生活手段を引きあげる事業部門に、どれだけの労働や生産手段や生活手段をなんの障害もなしに振り向けることができるかを、前もって計算しなければならないということである。これに反して、社会的理性が事後になってからはじめて発現するのを常とする資本主義社会では、絶えず大きな攪乱が生じるのであり、また生ぜざるをえないのである。」(『資本論』、全集24巻、385頁)
- (3) マルクスはスミスの利潤や地代についての取り扱いを次のように批判している。

「資本はそれが資本として前提されたのちにただ事後的に——悪循環 (mauvais cercle) ——他人の労働に対する命令権 (Commando) として現れるにすぎない。したがって、A・スミスによれば、そもそも労働は自分自身の生産物を賃金 (Lohn) として受けとるのであり、賃金 (Salair) は生産物に等しく、従って労働は賃労働ではなく、資本は資本でないことになる。そこで彼は、利潤と地代を生産費用の本源的要素としてもちこむために、つまり資本の生産過程から剰余価値をなんとか生み出させるために、きわめて粗雑な形態でこの利潤と地代を前提するのである。資本家は自分の資本をただで使われることは望まないし、同様に土地所有者もただで土地 (Grund und Boden) を生産に委ねようとは思わない。彼らはなんらかの代償を要求する。こうして彼らは、請求権をもった歴史的事実として取り入れられているのであって、説明されているのではない。」(『資本論草稿集』①、405-406頁)

- (4) 資本の出発点に置かれた蓄蔵貨幣は、流通から引き上げられて蓄蔵＝増大された貨幣である。したがって蓄蔵貨幣のうちにすでに資本の概念が含まれているのである。この点についてマルクスは、次のように述べている。「貨幣がその自立的存在のかたちで流通から出てくる限りでは、貨幣の自立的存在がそれ自体流通の結果として現れる。つまり、貨幣は流通をつうじて自分自身と結合する。この規定性のうちに、資本としての貨幣の規定性が、潜在的には含まれている。」(同上書、236頁)
- (5) 竹本洋氏は、次のように述べている。ジョイント・ストック・カンパニとプライベート・コパートナーとは同じように共同資本を組む組織であっても、その所有から分離された前者の取締役と、所有と経営とを一身に統一した、それゆえに責任とリスクをとる後者の社員(経営者)では、おのずから細心さと機略において雲泥の差が生まれるというのが、スミスの見解なのである。それゆえ問題は組織の編成原理の違い、あるいは形態の異なる組織における経営者の機能の違いにあって、組織にたいする個人の優位という点にあるのではない。』(『国富論を読む ヴィジョンと現実』、名古屋大学出版会、2005年、273頁) 正鵠を射た指摘である。
- (6) 西山氏は次のように述べている。「かくして現代日本の大企業において、所有による支配が崩壊し、経営者という名の管理労働者による地位と占有による支配が確立した。これほど日本資本主義の崩壊を証明するのにふさわしい事実はないといわなければならない。」(『支配構造論』、文真堂、1980年、49頁)
- (7) 「資本主義経済の編成原理」の基礎に「所有」を置く捉え方、すなわち「所有基礎」論に対する批判は大谷禎之介『社会経済学』、桜井書店、207-209頁、宮田和保『資本の時代と社会経済学』、大月書店を参照。

おわりに

『国富論』第一編は、労働の生産力＝分業(労働の分割)―商業社会の成立という順序で考察されている。ここでは、労働が富の本源である。人民全体を食べさせ、着せ、住まわせる者は労働者であった。土地を耕作する者ももちろん労働者であった。生産力を発展させる主体も労働者であり、労働者が技巧を増進し、時間を節約し、機械を発明することによって生産力を発展させるのである。ところが、第二編の資本の蓄積を論じるところではこれがすべて正反対のものに転じるのである。資本の蓄積がいっさいの推進

力となる。富が資本として自立化し、それが主体となり労働に対立してくるのである。人間が主体的に労働するのではなく、労働者は資本によって労働させられる存在になる。労働者が人民を扶養するのではなく、労働者が資本によって扶養される存在になる。人間が土地を耕作するのではなく、「資財が土地を耕作する」(WN, II, p. 333.) のである。第一編では分業が資財の蓄積に先行したのであるが、第二編では資材の蓄積が分業に先行するのである。労働の生産力を発展させるのも追加的資本の役割になる。このように『国富論』第一編と第二編以降とは富とそれを生産する人間の関係が完全に逆の関係になっており、矛盾する内容になっている。しかし、この矛盾はスミスの非論理的な思考能力に由来するのではなく、資本主義的生産の現実の矛盾の客観的な反映として捉えなければならない。スミスは、一方では、資本主義的生産の本質的内容を鋭くえぐり出し、富の本質を労働に求める。しかし、他方において資本主義的生産の現象をあるがままに叙述し、資本こそ富の本源であると主張する。本質と現象を繋ぐ媒介環が存在しない。したがって、理論の矛盾が際だったかたちで現れることになる。しかし、これは単に理論の矛盾ではない。資本主義的生産のもとでは、人格的諸力が物的諸力として、労働の生産力が資本の生産力として妥当するのであり、彼の主張の矛盾はこの現実の転倒＝矛盾の反映なのである。スミスは、無自覚ながら、理論的矛盾というかたちで資本主義的生産の現実の矛盾を表現しているのである。